

わが国社会主義建設での千里馬作業班運動

——『우리나라 사회주의 건설에서의千里馬
작업반운동』, 平壤, 朝鮮労働党出版社, 1961. ——

I

以下に紹介する文献は、北朝鮮における社会主義競争の分析である。原題は『わが国社会主義建設での千里馬作業班運動』となっている。この本は、1961年9月11日から17日までの1週間にわたって開かれた朝鮮労働党第4回大会記念出版物の一つとして、労働党出版社から出版された。執筆は金日成総合大学の教員6名によってなされ、「党员と勤労者たちの学習と実践活動を多少なりとも」助けるためにまとめられたものである旨付記されている。紹介にはいる前に「千里馬作業班」という名称の由来について簡単に説明しておくほうがよいと思われる。北朝鮮における社会主義競争はすでに1946年当時から行なわれていたが、社会主義的経済形態は、まだ工業部門にのみ限られており、社会主義競争が発展する基盤が十分でなかった。朝鮮戦争中も、この種の運動は行なわれていたが、本格的に展開されるようになったのは、朝鮮戦争以後、農業の協同化が推進され、工業はもちろん、農業においても社会主義競争の基盤が整ってきたと考えられる1957年頃と見てよい。1957年は、朝鮮戦争後の「人民経済復旧発展3カ年計画」が終わり、「第1次5カ年計画」の最初の年に当たり、翌1958年8月には農業の協同化が100%に達するという時点である。この頃から社会主義競争は「千里馬運動」と呼ばれるようになり、さらに1959年には「千里馬作業班運動」に発展した。「千里馬」とは、朝鮮古来からの伝説の一つに出てくる名馬で、1日に千里（日本の百里）を走ると伝えられ、この馬のような速度で社会主義を建設しようというところから上記のように呼ばれるようになったといわれている。北朝鮮における社会主義競争は、この「千里馬作業班運動」以後、量的・質的に急速な進展を示し、「第1次5カ年計画」の早期達成と1961年から始まった「7カ年計画」の経済・社会建設で大きな役割を果たしている。

II

- まず全体の構成をみるとつぎの各章からなっている。
- 第1章 千里馬作業班運動の本質
 - 第2章 千里馬作業班運動の発生・発展
 - 第3章 千里馬作業班運動は労働生産能率向上の強力な推進力
 - 第4章 千里馬作業班運動は大衆的経済運営のすばらしい方法
 - 第5章 千里馬作業班運動は共産主義教育の学校
 - 第6章 千里馬作業班運動はわが党群衆路線の偉大な勝利
 - 第7章 千里馬作業班運動をより拡大発展させるための課業

以下各章ごとみにみていくこととする。

1. まず第1章の冒頭につぎのような引用がある。「千里馬作業班運動は、わが勤労者たちの労働と生活に一大転変をもたらす新しい群衆の革新運動であり、最も高い形態の社会主義の競争運動(注1)である」(金日成)。「千里馬作業班運動」が社会主義競争であるかぎり、それはソ連をはじめとする諸社会主義国で行なわれている社会主義競争と、少なくともその本質においては同じであると考えるとよいだろう。事実第1章は本質の糾明に当てられているのであるが、その点では社会主義競争に関する過去の研究によって明らかにされているところと変わりないと考えられる(注2)。したがってここではそれをくりかえすことは止め、なぜ「千里馬作業班運動」が「最も高い形態」なのかという点に焦点をおいてみてゆくこととする。この点に関して、「最も高い形態の社会主義競争運動としての千里馬作業班運動の特徴は、その内容と深度、運動の基調とその発展の方法等で明白に表現されている」と述べている。まず内容については、生産と技術だけでなく文化・思想・道徳等、勤労者の社会生活のすべての領域を包括しており、「技術革命」「文化革命」

として「馬車の両輪」をなすものであるとされている。「技術革命」においては技術に対する神秘主義を打破し、先進的なものを大胆に導入することによって、生産を飛躍的に高め、労働生産性を急速に高めること、また「文化革命」においては、個人主義・利己主義・消極性等、勤労者の意識の中に残存するいっさいの古い思想を一掃し、共産主義の思想・教養を身につけることがそれぞれ主要な内容である。つぎには運動の「深度」という点であるが、これについては明確な指摘はない。しかし「文化革命」として勤労者のあらゆる生活領域を包括するようになったということは深度を示すものと考えてよいだろう。3番目に運動の「基調」についてはそれまでほとんど工業部門に限られていたのが、単に工業部門だけでなく農業・建設・運輸・商業・教育・保健・科学・文学・芸術・体育等あらゆる部門にわたって展開されるものとなってきたことであり、最後に「運動発展の方法」において特徴的なことは、問題の解決に当たって解説・説伏に重点をおき、同志の友愛と共産主義的相互補助に基づいて集団的に行なわれることである。これらの諸点に「最も高い形態」に達した社会主義競争の特徴を求め、または第1章の内容をなしている。

2. つぎに第2章は二つの節からなっている。(1)千里馬作業班運動の発生と、(2)千里馬作業班運動の拡大発展である。(1)においては、1959年「千里馬作業班運動」が発生するまで、1945年以後北朝鮮における社会主義競争がどのように発展してきたかが、解放後の時期(1945~49)、朝鮮戦争の時期(1950~53)、3カ年計画の時期(1954~56)、第1次5カ年計画の時期(1957~60) (注3)のそれぞれの時期の経済的・社会的背景とともに簡潔にまとめられている。つぎに(2)では1959年3月、降仙製鋼所の陳鷹源作業班の人々が「千里馬作業班運動」を發起して以来、どのように普及していったか、またどのようにその内容を充実したか、さらに労働党中央委員会、職業総同盟(産業別労働組合の全国組織)がどのような役割を果たしたか等の点について、具体的な事例をおりまぜながら述べられている。ここではこれらの点にいちいちふれることはできないので、ただこの運動の発展状況を示す2, 3の表を抜すいすることにとどめ、つぎの章へ移りたい。第3, 4, 5の各章では「千里馬作業班運動」の果たしている役割が具体的に分析されている。

3. 第3章では労働生産率を向上させるうえにおいて、この運動がどのように寄与しているかということが三つの点から分析されている。まず第1節では「千里馬

第1表 「千里馬作業班運動」部門別参加状況 (1960年2月末現在)

部 門	参加作業班数	参加人員数	称号を授与された数 ⁽¹⁾
金 属	1,023	18,205	48
機 械	456	9,191	30
力 工	692	15,104	33
建 設	391	9,449	25
建 設	188	4,349	5
農 業	59	2,928	5
教 育	546	8,102	26
文 化	86	1,599	—
保 健	40	1,051	1
運 輸			
協 同 団 体			
そ の 他			
合 計	3,481	69,978	173

(注) (1) 運動に参加し、職業総同盟の定めた規定に基づいて「千里馬作業班称号」というのが授与された作業班、称号を2度受ける班もあり、それは「2重千里馬作業班」と呼ばれている。

(2) 1958年6月労働党中央委で郡を単位として食糧品・衣料品などの日用品工業を拡大することを決定し、新たに1000余の企業が建設された。これを含め1962年末で2000余に達している。(『きよの朝鮮』, 1962年12月号)

(出所) 『わが国社会主義建設での千里馬作業班運動』, 第2章第2節。職総中央委組織部提供。

第2表 運動の拡大状況 1960年2~8月の期間

	参加作業班数	参加人員数
2月現在	3,481	69,978
3月 "	3,790	78,712
5月 "	4,920	109,419
6月 "	6,793	132,263
7月 "	8,620	178,406
8月 "	10,788	227,326

(注) 農業協同組合除外。

(出所) 第1表に同じ。

第3表 運動拡大状況 1960年8~12月の期間

	参加作業班数	その人員数	千里馬作業班	2重千里馬作業班
8月	10,788	227,326	767	14
9月	13,484	274,089	852	15
10月	16,887	319,699	852	15
11月	19,721	356,627	868	15
12月	22,082	387,412	911	15

(出所) 第1表に同じ。

作業班運動」に参加した人々の積極性・自発性・創造性等によってどれほど生産率が向上しているかが述べられている。勤労者の生産に対する上記のような態度は、生産工程の機械化・自動化のための創意・考案・発明・合理化等によって表現される。今一つの分析結果をみると

1964年上半年間に全国の工業部門で57名当たり1件の創意・発明が実現されたのに対し、この運動に参加して称号を授けられた500の作業班の6カ月間の成績をみると3864件に達し、2.7名当たり1件の創意・発明がなされたことになっている。この節ではさらに、鉄道の線路班、鉱山、機械工場、トラクター工場等およそ六つの事例にわたって、発明・合理化の過程が示されている。さて第2節は作業班が集団的な活動によって能率を向上しているということについてである。「千里馬作業班運動」は、「優秀な革新者や創意考案の名手で組織された実践作業班によってだけでなく、既存作業班それぞれで集団的革新を起こすようにした」ことに重要な意義が認められており、また勤労者たちが「共同の目的のために闘争し、共同の成果のために協力する」という相互援助、共同の向上が弱肉強食の資本主義社会における競争に対する社会主義社会の競争の優越性として強調されている。さて集団的な活動の優越性は「いろいろな人たちが力を合わせて共同で考え、共同で努力するたびに、人々がそれぞれ一つの角度、一つの側面から古いものを否定して新しいものを創造しても、同時にいろいろな角度と側面から問題解決の方途を捜し出すことができる」点にあり、これには「生産協議会」という組織が重要な役割を果たしているといわれている。最後は技術・文化水準の向上による能率の向上に関する分析である。技術・文化水準の向上とは、無技能工をなくし高級技能工・多技能工を養成し、皆が高い技術知識を身につけることである。「千里馬作業班運動」の一環としてのこの運動は、現存設備の能力をより合理的に利用すること、労働組織の改善、補助人員の縮小等を可能にすることによって生産能率の向上に寄与する。ここでもフンサン熔業工場土管職場、ソ・ピョンジョン作業班をはじめ、四つの具体例があげられている。

4. 第4章は4節に分かれる。この章では「大衆的経済運営」の方法という観点から「千里馬作業班運動」が扱われている。「大衆的経済運営」というのは、労働者大衆が直接企業管理に参加することである。第1節は、それが社会主義社会に特有なことであること、またなぜそれがすぐれたことなのか、ということについての一般的叙述が中心となっており、第4節はその一般的な優越性と「千里馬作業班運動」との関係が扱われている。そこで第4節にあげられている優越点をみることによって両節の紹介とする。4節ではいくつかの点があげられている。すなわち、(1)作業の計画化水準の向上、(2)企業の

管理係と管理方法の不断の改善、(3)労働組織の改善、(4)企業を管理し、生産を組織する技能・知識を体得させること等である。そしてこれらの諸点は「勤労者大衆を生産と企業管理の主人」にしたという点に集約されている。さて第2節、第3節は具体的にはどのようにして生産と企業管理の「主人」になったのかということである。それは「当直班長制」と「内部採算制」である。まず「当直班長制」というのは、以前ある特定の人が行っていた班長を班員全員が交替で行なうものである。「当直班長」の期間、その期間中の主要目標等は、それぞれの具体的条件の中で研究されねばならないとされ、また班長の性格についてはつぎのように述べられている。「当直班長が事業を行なう期間に、班内の全般的事業を処理したとしても、かれが作業班事業全体に対して、唯一の責任者として、行政的責任を負うことはできない。当直班長はまた全期間にわたって、全般的事業に対して指導することもできない」。最後に「内部採算制」とは企業内の職場、作業班等で適用されるものである。これは「計画原価と実績原価を対比する方法」で行なわれ、これを行なうことによって、(1)労働時間の合理的利用、(2)製品の質の向上、(3)原料消費基準の低下、(4)物資の節約、等の効果をあげており、さらに「内部採算制」を「個人採算制」(9F4)と結合させているところも現われているといわれる。以上が第4章の概略である。ここでも20に近い事例が取り上げられているが、全部が違う作業班というわけではなく、同じ作業班が何度か、別の面から取り上げられることがある。

5. 第3章第4章ではこの運動の主要な内容をなしている「馬車の両輪」の一方である「技術革命」が中心となっていた。第5章では残る一方の輪である「文化革命」が主になっている。「文化革命」とは第1章でみたように文化・思想・道徳等勤労者のあらゆる生活領域を包んだ革新を意味していた。「千里馬作業班運動」はそのための学校としての役割を果たしているというのがこの章の内容であり、おもにその教育内容についての第1節と教育の方法に関する第2節、3節の三つの節からなっている。まず教育の内容において最も強調されているのは「革命の伝統」を学ぶということである。それは1930年代における反日パルチザンの歴史から、「不屈の闘志」「同志の相互援助の品性」等を学ぶことであり、それがどんなに重要な役割を果たしているかが数事例にわたって指摘されている。つぎに第2節では教育方法の一つとして、「肯定的模範の普及、一般化」が重視されている

ことが述べられている。「肯定的模範」は多くは反日バルチザンの歴史の中にみられ、また朝鮮戦争における人民軍の闘争や戦後の建設の中からも数多く求めることができ、それにはまた個人的なものや集団的なものがあるといわれている。これはただ単に方法というだけではなく、その内容も同時に伴っているといえるだろう。こうしたことが重要視されるのは「人間を教育するには古いもの、不正なものを暴露し、批判する」だけでは不十分であり、そうした欠陥が現われないように、「最も新しい共産主義思想、意識で武装すること」が最も重要と考えられているためである。さて教育を行なう場合、それが集団的に行なわれており、そのことがなぜすぐれた方法となるのかということが第3節の内容である。集団的に教育を行なうということは、一つの集団の成員が互に教え合い、学び合うことであるが、これは「同志的相互援助」の原則にかなうものであり、(1)自分の欠陥を明瞭に知ることができる、(2)他人を責める前にまず自分の反省が必要となる、(3)大勢の人々の考えを反映できる、(4)一つの問題の解決に当たっても多方面から取り組み迅速に解決することができる、等のすぐれた点をもっているとされている。第3節では集団的教育においてどのような点に注意を払わねばならないかにも言及している。

6. 「千里馬作業班運動はわが党群衆路線の偉大な勝利」という表題でもわかるように、第6章では朝鮮労働党の「群衆路線」がこの運動の中でどのように貫かれているのかということが述べられている。「群衆路線」については「大衆を教えるだけでなく、大衆から学ぶ」ということがその基本要素であって、「大衆から学ぶということは党のあらゆる活動で大衆のすばらしい実践活動に基づいている」ことであり、「大衆を教えるということは党政策の本質とその遂行方途を大衆に解説、浸透しその貫徹へと大衆を組織動員すること」であると説明されている。この「群衆路線」と「千里馬作業班運動」との関連が説明されているが、もはやここでは必要がないと思われるので省略する。

7. 1961年から「7カ年計画」を始めている北朝鮮は、この運動をより拡大し、発展させてゆかねばならないが、そのためにどのような問題が残されているのかということを最後の第7章でまとめている。その中で、(1)組織の指導事業の強化、(2)指導上における二つの偏向、すなわち運動の神秘化と運動の行政化による上からの押しつけを克服すること、(3)職業同盟や民青団体が党と大衆を結びきずなどとなること、(4)青年がその特性である敏

感さ、積極性、大胆性等を生かして運動での先進的役割を果たすこと、等が重要なこととして指摘されている。以上がこの書の主要な内容である。

(注1) ふつう「社会主義競争」という言葉が使われるが、北朝鮮では「社会主義の競争運動」「社会主義競争運動」等の言葉も使われている。「社会主義競争」は競争それ自体とその競争を広める運動との二つの側面をもっているが、特にそれを区別して使用しているのではないようである。

(注2) 過去の研究成果については、おもに『増訂経済学小辞典』(昭和34年、岩波書店)の「社会主義下の社会的労働」(海道進)を参考とした。

(注3) 「第1次5カ年計画」は1957～61年の予定で始められたが、実際には3年足りずで実行されたといわれている。したがって1960年はすでにつぎの計画の準備段階とされていたが、ここでは1960年までの運動が扱われているので便宜上1960年までとした。

(注4) 「個人採算制」というのは先進的なところで取り入れられているもので、まだその例も少なくないと考えられ、厳密にはどのように規定されるものか明らかでないが、ここでは一つの例をあげておこう。平安北道新義州にある被服工場の「ベ・ソンシル2重千里馬作業班」では、「個人採算制カード」を作り、各々の労働者が自己の生産計画の遂行状況・資材の消費状況等を記入する。自分の賃金は自分で計算し作業の計画指標と各種消費基準の設定にも参加し、作業の総括・評価を行なう。この結果「職工長」「記録員」等、直接生産にタッチしていなかった人が不要となり、これを全工場に一般化することによって、40余名の人が、直接生産部門へまわることができるようになったといわれている。

III

近年北朝鮮で出版される新聞・雑誌等には「千里馬作業班運動」に関する論文・記事が数多くある。しかしそれらは、その性質上どうしても一時期・少数の事例に限られてしまい、長い期間にわたる運動を多方面から分析することはなされていない。それをなしたおそらく唯一の文献として、この書は北朝鮮の社会主義競争を知るうえで欠くことのできないものである。またこれとは違った性質のものであるが、『척리마작업반운동』(『千里馬作業班運動』、職業同盟出版社、1960)がある。これは1960年8月22日、平壤で開かれた「全国千里馬作業班運

動先駆者大会」で行なった金日成の演説、職業同盟中央委員会委員長の報告、参加者の討論等を収録したもので上記の文献とともに重要なものである。和文のものではこの運動に関する論文、関係記事をよく掲載する雑誌に『きょうの朝鮮』誌（外国文出版社、月刊）がある。その他日本で出版された単行本、雑誌等でもいくつかこれを扱ったものがあるが、ここでは省略する。最後にこれ

らの文献利用や運動についてみると、常に北朝鮮がおかれていた具体的な諸条件——長期間の被植民地、南北分断、朝鮮戦争による極度の破壊等々——の中で検討されねばならないであろうことを、当然のことながら付記しておきたい。

（調査研究部東アジア調査室 桜井 浩）

アフリカの土地慣習法の構造

—— アジア経済研究シリーズ 第48集 ——

青山道夫 編

第1章 総論

- 第1節 土地保有制度の経済的・社会的・政治的重要性
- 第2節 未開民族の土地保有に関する最近の民族学上の成果
—— 土地耕作権・放牧権・樹木所有権 ——
- 第3節 原住民土地保有制度の研究動向と研究方法
—— アフリカ原住民土地保有制度の研究の動向・アフリカ原住民土地保有制度の研究の方法 ——
- 第4節 社会変動と土地保有との関係
- 第5節 アフリカの土地政策
—— 土地政策の背景・土地政策の諸問題・土地政策の基本的方向 ——

第2章 ニャキェサ族——種族的事例研究(1)

- 第1節 自然的・社会的条件
—— 地形と沿革・人口・耕地形態と耕地規模 ——
- 第2節 社会構造
—— 家族集団と親族組織・年齢階梯別村落組織・政治組織 ——
- 第3節 土地慣習法
—— 家族構成員の土地に関する諸権利体系・土地保有と社会構造との関係・土地相続慣行・共同放牧地の慣行・樹木所有権の慣行 ——
- 第4節 社会変動に基づく土地保有制度の変化
—— 土地相続慣行の変更・村長の土地に対する権限の強化・村落共同体の構造の変化・保有地の分散と細分化 ——

第3章 高原トンガ族——種族的事例研究(2)

- 第1節 自然的・社会的条件
—— トンガ集団の起源と沿革・トンガランドの地形・人口 ——
- 第2節 社会構造
—— 村落共同体 ——
- 第3節 親族組織
- 第4節 政治組織
- 第5節 土地慣習法
—— 土地に関する慣行と制定法との関係・土地慣行と耕地不足の現象・土地保有形態・生産と消費 ——

第4章 ナイジェリア——地域的事例研究——

- 第1節 ナイジェリアの歴史の概観
—— 旧植民地・旧保護領・信託統治領 ——
- 第2節 土地政策の政治的意義
- 第3節 原住民の土地保有体系
—— 一般的特徴・土地に関する権利・義務の分析・酋長の土地に関する権限・酋長と土地との関係・家長と土地との関係・土地保有者の権利の法的性格・土地保有能力 ——
- 第4節 原住民の土地相続の社会規範
—— ヨルバ族の相続規範・イボ族の相続規範・北部地域の相続規範 ——

第5章 むすび